

Whale Hunting and Indigenous Culture of the Faroe Islands, Denmark : A Brief Report in Comparison with Taiji, Japan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-07-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河島, 基弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009434

デンマーク領フェロー諸島の捕鯨文化 — 和歌山県太地町との比較から

河島 基弘
(群馬大学)

1 はじめに

沿岸捕鯨で有名な日本の和歌山県太地町と重ね合わせて「北方のタイジ」(Taiji of the North)と呼ばれることもあるフェロー諸島は、北緯62度、西経6度の北大西洋上に位置するデンマークの自治領である。地図で見ると、アイスランド、スコットランド、ノルウェーの間にあり、米国アラスカ州最大の都市、アンカレッジとほぼ同緯度である。18の島々から構成され、総面積は1,399平方キロメートル。火山性の土地は起伏が激しく、冷涼な気候と相まって、農業には不向きである。主都トースハウンなどでは人の手によって木々が植えられているが、自然のままの山並みには丈の低い草が生えているだけで森林は全く見当たらない(写真1)。山々には多くの滝が流れるなど水資源は豊富だが、土地が痩せているため、特別に手入れしない限り木が生育しないのである。このため島民は、水産業と羊の放牧、観光に依存した生活を送っている。そして、人口5万人ほどのこの島を世界的に有名にしているのがゴンドウクジラの追い込み猟である。遮る物がない浜辺で行なわれる追い込み猟は外国の反捕鯨団体の格好の標的となっており、過激な実力行使で日本でも有名な環境保護団体のシー・シェパード(Sea Shepard Conservation Society)はここ数年、フェロー諸島に対する反捕鯨活動を活発化させている。

本稿では、フェロー諸島の歴史と文化、産業について概観した後、ゴンドウクジラ猟の仕組み、鯨産物の分配方法や島独特の食文化などについて、主に太地町との比較の中で考察する。続いて、国際的に高まる捕鯨反対の声に対処するために島民がゴンドウクジラ猟をより人道的なものに改良してきたこと、反捕鯨運動が島民のアイデンティティを覚醒させている面があることを紹介する。最後に、海洋汚染によって鯨肉の人体への影響が懸念される中で、捕鯨の存続が危ぶまれる事態が起きていることを、筆者による島民へのインタビューを交えながら報告する¹⁾。

2 フェロー諸島の歴史、文化、産業

フェロー諸島の島名は「羊の島」を意味する古ノルド語に由来する(Nauerby 1996; Proctor 2013; Fielding, Davis, and Singleton 2015; The Government of Faroe Islands

2018a)。島への最初の入植者は6世紀頃にアイルランドからやって来た修道士と見られ、その後、9世紀頃にイギリスやノルウェーからバイキングが入植し、12世紀までにノルウェー領に組み込まれた。1380年にノルウェーとデンマークが同君連合を結成するとその一部となった。1814年にノルウェーがスウェーデンに割譲されてからは、第2次世界大戦中にイギリス軍の占領下に置かれた一時期を除いてデンマーク領である。1948年には、国防、外交、司法、金融政策を除いた自治権を獲得した。すなわち、海洋生物資源の保護・管理、環境保全、エネルギー開発、貿易、徴税、関税、産業政策、交通・通信インフラストラクチャー、社会保障、教育などに広範な権限を持つ。フェロー諸島は、島民自慢の「世界最古の議会」と首相を有し、デンマーク国会にも議席を持っている。また、デンマーク本国と違って欧州連合に属さないなど、独自の政策と高度な自治を誇る。



写真1 海上から見たトースハウンの街並み (2017年9月19日、筆者撮影)

高緯度にあるため気候は冷涼であり、真夏でも平均気温は11度程度にとどまる。ただし、メキシコ湾流のおかげで冬は比較的温暖であり、平均気温は冬でも3度程度と、日本の仙台市などより高い。日照時間は短く、曇りや雨、霧の日が多く、頻繁に強風が吹き荒れる。天気は1日のうちに何度も変わる。火山積層の土壌は地味に欠け、低気温と相まって、栽培できるのはジャガイモと耐寒性野菜のルバーブ程度であり、農業は発達していない。このため、タラ、サバ、オヒョウを中心とした漁業、サーモンの養殖、水産加工業が島の主要産業であり、合わせて国内総生産の約20%、輸出の約90%を占める。中でも高品質のアトランティックサーモンは日本でも販売されているほどであり、最大

の輸出品である。国内消費用としては、約7万匹と人口よりも多い羊の放牧や酪農、ゴンドウクジラを主な対象とした捕鯨が盛んである。珍しいところでは、丸みを帯びた愛くるしい体形とオレンジ色の太い嘴で日本でも人気のパフィン（ニシツノメドリ）猟やフルマカモメ猟なども伝統的に島の食生活を支えてきた。海鳥の卵も島民にとって伝統的に貴重な蛋白源である。近年では観光業の発展が目覚ましく、漁業に次ぐ規模にまで成長し、国内総生産の約6%を占める。このほか毎年デンマークから受ける多額の補助金も島の経済を支えている。その額は2013年には6億3,000万デンマーク・クローネ（日本円で約95億円）に上り、国内総生産の約4%に相当する。

フェロー諸島は独自の文化を育んできた。中核にあるのは、古ノルド語の流れを汲み、バイキングの言葉に最も近いとされるフェロー語である。北欧語の一種であるが、他のスカンジナビア諸国から隔絶された環境に長く置かれたことで、大国の影響による言語変容を比較的免れてきた。15世紀にデンマークによってフェロー語の筆記法の使用が禁止されたものの、豊かな口述伝承が維持され、民話やバラードなどに結実した。バラードにのせて島民が輪になって踊るチェーンダンスは今でも受け継がれ、観光資源にもなっている。フェロー語は、19世紀に高まったナショナリズムの流れの中で、その重要性が次第に見直され、デンマークからの自治権を獲得した1948年以降は「国語」としての地位を獲得、1998年にはフェロー語の国語辞典が編纂されるまでになった。

食文化として有名なのは、羊肉を潮風に当てて自然乾燥させた干し肉で、島の特産品として珍重されている。島では、タラやゴンドウクジラの肉も干し肉として利用される。ただし、主都トースハウンではピザ店が多く見られ、ハンバーガーのチェーン店さえある。スーパーではヨーロッパの大都市とほぼ同じ食品が売られており、特に都市部では島民の食生活は極めて近代化されている。

3 捕鯨文化

3.1 捕鯨の歴史と猟の概要

ここからは、フェロー諸島におけるゴンドウクジラ猟を太地町のクジラ（イルカ）追い込み猟と比較しながら見ていく。フェロー諸島で主に捕鯨の対象となっているのは、ハクジラ亜目マイルカ科に属するヒレナガゴンドウと呼ばれる鯨種（以下ゴンドウクジラと表記）で、オスの場合には最大で全長7メートル、重さ3トン程度まで成長する²⁾。フェロー語で「grindadráp」（英語表記はgrind）と呼ばれるゴンドウクジラ猟の歴史は古く、考古学上の証拠によれば、バイキングの時代まで遡る。フェロー諸島のゴンドウクジラ猟に最初に言及した公式文書は、1298年に後のノルウェー国王が発した「Sheep Letter」と呼ばれる勅令で、羊の所有権やクジラの分配方法などが定められた。フェロー諸島では、クジラ猟の日付や場所、捕獲数などに関する統計は1584年から取られている

(The Government of Faroe Islands 2018b)。1641年から1708年など記録が一部抜け落ちている時代もあるが、統計は全体的に極めて正確なものであり、島民は「野生動物の利用に関する継続的統計としては、おそらく世界最長」(同)と自慢する。捕獲数は年によって増減が著しいが、平均で年間800頭程度である(図1)。1941年のように1年間に4,480頭も捕れた年もあれば、2008年のように捕獲数ゼロの年もある。もう少し長い目で見ても、1750年から1795年までのように45年間で2,459頭しか捕獲できなかった時期もあり、ゴンドウクジラが予見不可能な活動であることが分かる。フェロー島民にとって、クジラはまさに人知を超えた「天からの恵み」と言えよう。21世紀に入ってから平均捕獲数は約600頭。いずれにしても、自然条件が極めて厳しいフェロー諸島の住民にとってゴンドウクジラは歴史的に貴重な天然資源であり、肉と脂肪が食用に利用されるほか、過去において、脂肪は明かりの燃料に、皮の一部はロープに、また胃袋は猟や漁業用の浮きなどに用いられた(Joensen 2009)。

時代が下って近代に入ると、法制面でゴンドウクジラ猟の整備が進み、1832年には猟に関する最初の法規制が制定された。1832年の法規制は、猟に際して住民が協力する地区の割り振り、鯨肉と脂肪の分配方法、違反者への処罰規定など、それまで慣習と村ごとの決まりに依存していた制度を法的に明確化したものであり、全島民が遵守を求められた。1832年の法規制によって、ゴンドウクジラは「地域性の強いものからフェロー諸島の公的生活の一部になった」(Joensen 2009: 69)とされる。慣習を法的に明確化することの意義として、不猟が続いた場合などに猟の知識や経験、鯨産物の分配方法などを後世に伝える役割を指摘する意見もある(Kerins 2010)。ゴンドウクジラ猟の法規制は

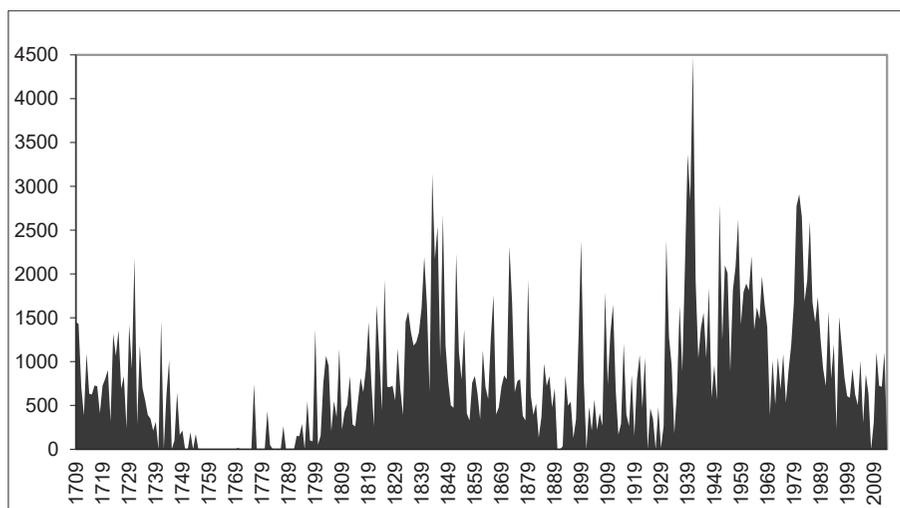


図1 1709-2015年のゴンドウクジラ猟の捕獲数
 出典：フェロー自然史博物館 Bjami Mikkelsen 氏提供。

その後も時代の変化に合わせて何度も改訂されており、最新の改訂は2015年に実施された。

ゴンドウクジラ鯨に関する最初の法規制の導入から3年後の1835年、フェロー諸島の捕鯨文化を論じる上で重要な出来事があった。デンマークから派遣されていた総督、クリスチャン・ブルエンによる捕鯨バラード (Grindavísa) の創作である (Nauerby 1996: 147)。捕鯨バラードは現在でもフェロー島民がチェーンダンスを踊る際に歌われるほど島に根付いており、島民のアイデンティティにとって大きな意味合いを持っている。19世紀から20世紀にかけてフェロー島民の間で「国民意識」が高まり、フェロー語の正書法も考案される中で、生活の糧としてのゴンドウクジラ鯨が単なる食料調達のための活動から文化的象徴としての色合いを帯びようになっていく (Nauerby 1996; Joensen 2009)。

フェロー諸島のゴンドウクジラ鯨は概ね以下のようなシステムと段取りで行なわれる (Ministry of Fisheries 2013; Fielding, Davis, and Singleton 2015)。フェロー諸島は行政上6つの地区に分かれており、鯨に適した浜辺や入り江など23か所が捕鯨場所に指定されている。この23か所以外では捕鯨が許されていない。6地区のそれぞれに捕鯨を統括する警察署長 (フェロー語で sýslumaður, 英語表記は sheriff) がいるが、実際に追い込み鯨を指揮するのは、捕鯨指定地の班長 (フェロー語で grindaformaður, 英語表記は whaling foreman) である。班長は、鯨の経験や知識などに基づいて地元住民から4人が選ばれる。任期は5年で、15歳以上が有資格者である (Joensen 2009; Kerins 2010; Fielding, Davis, and Singleton 2015)。

毎年秋から春までと鯨期が限られている太地町と違い、フェロー諸島のゴンドウクジラ鯨に特定の鯨期はなく1年中実施される。ただし、最も多いのは、クジラが餌となるイカを求めて群れで島の沖合にやって来る夏期である。最初に、クジラの群れを発見した漁師や島民から地区の警察署長にクジラの見撃情報が報告される。報告を受けた警察署長が今度は、最寄りの捕鯨指定地の班長にクジラ発見を伝達する。班長は警察署長の許可を得た上で、その日の天候や海の荒れ具合、クジラの群れの陸地からの距離などを考慮して鯨を実施するかどうか、実施する場合にはどの場所に追い込むのかを決定し、その内容を直ちに地元住民に知らせる。知らせを受けた住民は仕事などの日常業務を中断して船やボートで沖合に急行。海上にいる班長の指示の下で、クジラの群れが沖合に逃げるができないように半円状に船団を組み、群れを目的の浜辺や入り江に追い込む。船団を組む際は、大きな船が外周に位置し、小回りの利くボートが浜辺に近い配置となる。近年では手漕ぎボートが使用されることは稀で、ほとんどがエンジン付きボートである。

クジラの追い込みには、石に紐が付いていて、海中に投げ入れた時に引き戻せるようになっている特殊な道具などが使われる。それはクジラを驚かして進路を妨害するのに使用される。ボートに乗った住民はそれを海中に投げ入れ、クジラを進路を妨害したり



写真2 ゴンドウクジラの追い込み猟の様子 (フェロー自然史博物館 Bjarni Mikkelson 氏提供)

逃げ道を塞いだりする。太地町と違い、網でクジラを囲い込むことはしない。パニックになったクジラは群れ単位で浜辺に突進し、そのまま浜辺に乗り上げるか、浅瀬にはまって自由に泳げなくなる。海中に残ったクジラも船団の輪が縮まっているため沖合に戻ることができず、班長の指示によって浜辺で待機していた住民によって、片方にロープの付いた特殊なフックを噴気孔に差し込まれ、浜辺に引っ張り上げられる。身動きができなくなったクジラは専用の捕殺槍で脊椎と動脈を切断され、絶命させられる。動脈から流れ出る血で浜辺は真っ赤に染まり、膝から腰まで海水に浸かった住民が返り血を浴びる様は、見慣れない者にとって一種凄まじい光景である (写真2)。ゴンドウクジラの追い込み猟は、平素は平凡な日常を送る島民に「食料だけでなく、興奮、ドラマ、人々が集う機会を提供する」とされる (Joensen 2009: 29)。

3.2 鯨産物の分配方法と食文化

フェロー諸島では、仕留めたクジラは浜辺に並べられるか、少し離れた場所にある平らな地面などにトラックやクレーンで運ばれる。海上でゴンドウクジラ猟の指揮を執るのは地元の班長だが、陸に揚げられた後は警察署長の出番である。警察署長は地元住民の中から信頼できる数人を選び、クジラの捕獲数、大きさ、価値を計測させた上で、肉と脂肪の配分を決める (Ministry of Fisheries 2013)。捕獲数は鯨体の頭部にアラビア数字の通し番号をナイフで刻み付ける。クジラの価値は伝統的にスキン (skinn) という単位で表される。1 スキンはおよそ鯨肉38キロ、脂肪34キロに相当する (Kerins 2010: 132)。目から肛門までの長さが3.14メートルのクジラの価値がおよそ20スキン。クジラ大きさは、古来より使われている目盛りが入った特殊な棒や巻き尺で測られ、そのク



写真3 港に並べられたゴンドウクジラ（フェロー自然史博物館 Bjarni Mikkelsen 氏提供：噴気孔の後ろが捕殺槍で切断されている。手前のクジラの胸びれにはローマ数字で鯨体の価値が、その奥のクジラの頭部にはアラビア数字で通し番号が刻み付けられている。）

ジラが何スキンに相当するのかは、鯨体の胸びれ部分にローマ数字を刻み付けて表示する³⁾(写真3)。また、こうした計測と同時並行で、クジラの腹部をナイフで切り裂いて内臓を取り出し、鯨体の腐敗を遅らせる処置がなされる。

肉と脂肪の分配方法については法律で一部決められているものの、地区の伝統や慣習によって違いがある上に、警察署長の現場判断も加わり、外部から見ると複雑である⁴⁾。以下は2013年改訂の法規制に書かれているものであり、猟で特定の役割を果たした者の取り分について概ね次のように定めている (Ministry of Fisheries 2013)⁵⁾。

- ・クジラの群れの発見者は、最大のクジラかそれと同価値の小さなクジラ数頭。
- ・(盗難防止など) 鯨体の監視役には1人当たり昼間の場合に1/2スキン、夜間の場合には1スキン、ボート1艘に対して1/2スキン。
- ・鯨体の計測者はクジラ100頭に対して2スキン、あるいは警察署長の裁量の取り分。
- ・警察署長は捕獲高の2%。
- ・班長は捕獲高の1% (班長が4人の場合、1人当たり0.25%)。
- ・(ボートや器物の) 損害の査定者は1人当たり1スキン、あるいは警察署長の裁量の取り分。
- ・警察署長の補佐役は労働と責任に応じた取り分。

- ・ 追い込みや屠殺など実際に猟に参加した14歳以上の者は警察署長が決めた取り分。
- ・ 猟が行われた地元の住民に一定割合を平等に分配。

警察署長は法規制や慣習に基づいて取り分を決めるのだが、地元住民に分配するだけの捕獲高を確保できなかった場合は、半分を猟の参加者で分け、残り半分をスーパーなどで販売し、その売上高は島の財源となる (Joensen 2009: 136)。十分な捕獲高があった場合、警察署長は直ちに各人の取り分を計算し、各人あるいは各コミュニティの取り分が書かれた切符を配布する⁶⁾。切符を受け取った者は、割り当てられたクジラの解体に取り掛かる。最初に脂肪部分がナイフで切り出され、皮を下にして地面に置く。その上に切り出した肉を乗せ、各人が自分の取り分の肉と脂肪を取っていく。先述したように、クジラの群れの発見者や班長など特定の役割を担った者以外は、肉と脂肪は平等に分配される。割り当てを受けた者はバケツやビニール袋に肉と脂肪を入れて、各家庭に持ち帰る。

持ち帰った肉と脂肪は伝統的な方法で調理される (Joensen 2009)。肉が新鮮なうちはステーキとして焼かれ、グレービーソースなどで味付けされる。ステーキにはジャガイモと脂肪が付け合わせとして出される。あるいは、シチュー用の鍋に肉と脂肪を入れ、ジャガイモなどと一緒に塩茹でするのも一般的である。長期保存する場合、肉を細長く切って家の軒先に吊るして、潮風に当てて2か月ほど天日干しにする。羊肉や魚の天日干しと同じ処理方法であり、鯨肉は発酵を経て水分が抜け、黒々とした乾燥肉となる。ビーフジャーキーを少し野性的にしたような味わいで、島民は火を通さずにそのまま食べたり、パンに挟んだりする。一方、脂肪は塩水に漬けて保存されるのが普通で、薄くスライスしたものを生のまま食べる。日本で珍重される鯨の尾の身に少し味が似ているが、脂肪がずっと多く、ねっとりしている上に、独特の臭みがある。食べ慣れていない者にとっては、なかなか手を出しにくい味である。しかし、野菜の栽培に向かないフェロー諸島の住民にとって、クジラの肉と脂肪はビタミンAとビタミンBの貴重な補給源であり、鉄分と蛋白質、不飽和脂肪酸を豊富に含む良質な食料であり続けてきた。現在では、肉と脂肪を冷凍庫に保存する家庭も多いが、天日干しと塩漬けの伝統は健在である (写真4)。ゴンドウクジラの捕獲数は年によって大きく変動するため正確な数字を出すことはできないが、猟から得られる鯨肉と脂肪は、フェロー諸島の食肉生産の25%程度を占めるとされる (Singleton 2016: 38)。

フェロー諸島のゴンドウクジラ猟の特徴は、①日本を含む世界各地で見られる捕鯨と違い、プロの捕鯨者ではなく、ボランティアの地元住民によって猟が行なわれること、②クジラの群れが島の近くを通りかかった時にだけ行なわれる待機型の捕鯨であること、③遮蔽物のない浜辺で行なわれるため誰でも猟の様子を目撃できること、④肉と脂肪が猟の参加者と地元住民に無償で分配される非商業ベースの捕鯨であることなどである⁷⁾。

これに対して太地町では、漁業協同組合に属する「太地いさな組合」のプロの漁師が

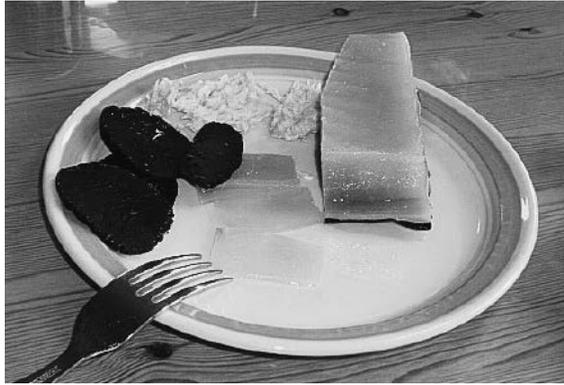


写真4 フェロー諸島の鯨料理（2015年9月11日，筆者撮影：向かって左側の黒い塊が天日干しの鯨肉，その右側が塩漬けされた脂肪のスライスと塊。奥が干し魚の身。）

船団を沖合に展開してクジラを探索する（遠藤 2011; 大隅 2017）。クジラの群れを発見すると，金属製の発音器を叩いてクジラを追い込み先の畠尻湾の入り江の景浦に誘導し，網で囲って群れの逃走を防ぐ。追い込んだ後は，外部の目に触れないように湾の一部に覆いを被せて，フェロー諸島から導入した捕殺槍を使ってクジラを絶命させたり，一部は生きたまま捕らえて水族館などに販売する。解体処理された鯨体の一部は組合員などの関係者に無償で配分されるが，多くは市場で入札や競りにかけられ，地元や近隣市町村のスーパーや料理屋などに販売されるほか，北九州などの遠隔地の市場にも送られる。下記の表1は，フェロー諸島と太地町のクジラ追い込み猟の特徴を比較したものである。

表1 フェロー諸島と太地町のクジラ追い込み猟の比較

	フェロー諸島	太地町
捕鯨の始まり	バイキングの時代（9世紀ごろ）	1606年
参加者	地元住民	漁協組合員
対象鯨種	ヒレナガゴンドウが中心で一部カマイルカなど。	コビレゴンドウ，バンドウイルカ，スジイルカなど9種。
猟期	1年中，ただし夏期が中心。	9月から4月の8か月間。
発見方法	待機型	探索型
追い込み方法	フェリーボート，漁船などでクジラを半円状に囲み，指定された湾や浜辺に誘導する。	捕鯨船団でクジラを半円状に囲んで金属音を鳴らして湾内に誘導。網で逃げ道を塞ぐ。
捕殺方法	特殊なフックをクジラの噴気孔に差し込んで浜辺に引っ張り揚げ，専用の捕殺槍で脊椎と動脈を切断する。	フェロー諸島から導入した捕殺槍を使用。一部は生け捕りにして内外の水族館などに販売する。
解体方法	浜辺や港などにおいてナイフを使って鯨肉と脂肪を切り出す。	魚市場の解剖場に運び，専用の包丁で解体する。
鯨体の分配	法規制と慣習に則り，猟の参加者と地元住民で分配する。	市場で入札や競りにかけて販売。一部は漁協組合員などに無償で配る。
調理方法	新鮮なうちはステーキなど。通常，肉は天日干して乾燥肉にし，脂肪は塩漬けにする。	肉も脂肪も刺身にするほか，煮たり焼いたりして食べる。おでんの具や缶詰にもなる。

（出典：遠藤 2011; 大隅 2017; 和歌山県 2018(ほか)）

3.3 反捕鯨運動の展開

こうした牧歌的なフェロー諸島のゴンドウクジラ猟を大きく揺るがすことになったのが、世界的な反捕鯨運動の高まりである。反捕鯨が国際的な課題として最初に浮上したのは、1972年に開かれた国際連合人間環境会議（ストックホルム会議）であり、「クジラを救えずして、どうして地球が救えるのか」をスローガンに、商業捕鯨の一時停止（モラトリアム）が提案された⁸⁾。クジラの保護が地球環境保護の象徴に祭り上げられたのである。提案は同年、鯨資源の調査・研究を行なったり利用規則を定めたりする国際機関である国際捕鯨委員会（International Whaling Commission, 略称IWC）によって否決されたが、アメリカやイギリスなどの反捕鯨国と、グリーンピース（Greenpeace）や世界自然保護基金（World Wide Fund for Nature, 略称WWF）など国際的な環境保護団体の活躍によって、1982年のIWC会議で商業捕鯨モラトリアムが採択された。ただし、IWCに管轄権があるのは大型鯨種だけであり、ゴンドウクジラは対象外である。

フェロー諸島のゴンドウクジラ猟が国際的な注目を集めることになったきっかけは、偶然によるものだった（Nauerby 1996: 156）。商業捕鯨モラトリアムの採択がすぐ目前に迫った1981年、グリーンピースの活動家数人がナガスクジラ猟の調査のためにフェロー諸島を訪問した⁹⁾。そして調査中にたまたまゴンドウクジラの追い込み猟を目撃し、猟についての否定的な報告書を作成した。1984年には、後に環境調査機関（Environmental Investigation Agency, 略称EIA）という民間の環境保護団体を設立することになるイギリス人活動家数人がゴンドウクジラ猟の調査のためにフェロー諸島を訪れた。彼らは翌1985年にも来島し、この時に撮影された追い込み猟の衝撃的な映像がイギリス内外に配信され、フェロー諸島の名前が世界中に知れ渡ることになる。以後、世界動物保護協会（World Society for the Protection of Animals, 略称WSPA、その後World Animal Protectionに名称変更）、クジラ・イルカ保護協会（Whale and Dolphin Conservation Society, 略称WDCS、その後Whale and Dolphin Conservation, 略称WDCに名称変更）、国際人道協会（Humane Society International, 略称HSI）などが次々とゴンドウクジラ猟の反対運動に加わり、一部の団体がイギリスやドイツなどでフェロー諸島からの輸入品のボイコットを呼びかける事態にまで発展した。これらの団体は現在でも、フェロー諸島のゴンドウクジラ猟に対して共同声明を出したり、ホームページで取り上げるなどの反対運動を続けている。

しかし21世紀以降において、フェロー諸島のゴンドウクジラ猟に対しても最も強力な抗議活動を展開しているのは、間違いなくシー・シェパードである。シー・シェパードは、キャンペーンの戦術や組織の在り方についての意見の相違からグリーンピースを追放されたポール・ワトソンが1977年に設立した環境保護団体である。ワトソンが反捕鯨運動に関わることになったのはグリーンピース時代の1974年と早く、「クジラを守るために死ぬ覚悟ができています」（Watson 1994: 164）と豪語するワトソンとシー・シェパー

ドにとって、反捕鯨は最も力を入れているキャンペーン分野である。ワトソンは人に危害を加えることは極力避けるが、海洋での不法行為に使われていると自らが判断した場合、それが器物であれば容赦なく破壊する。捕鯨船への体当たり、捕鯨に使用されるロープの切断、クジラの逃走の手助けなどの妨害活動は厭わない。

シー・シェパードのフェロー諸島に対するキャンペーンは1985年と1986年に行なわれた後、しばらく間を置いて2000年に再開され、2011年に復活。2014年から2016年まで3年続けて実施された（SSCS 2015; 2016）。中でも2014年のキャンペーンは大規模なものであり、「Grindstop 2014」と名付けられたキャンペーンは6月中旬から10月初めまで行なわれ、27か国から延べ約500人のボランティアが参加した（Singleton 2016）。陸上では、シー・シェパードのロゴが入った黒いジャケットを身につけたボランティアが何か所かに分かれて、ゴンドウクジラ猟が行なわれるかどうかを監視。海上にはボートや船を配置し、島に近づいたクジラやイルカを追い払うなどの活動を展開した。また、自らの活動の様子を映像付きでホームページ上に流すなどのメディア・キャンペーンも実施した。人口約5万の島にとっては、島の日常生活を揺るがす大事件である。同キャンペーンは、デンマーク当局によるシー・シェパード活動家の逮捕や船の接収にまで発展した。フェロー諸島の伝統文化を無視し、クジラの生息数や猟の実態などについて虚実の入り混じった情報を海外のメディアに発信するシー・シェパードの評判は島民の間で極めて悪く、悪いニュースを流して活動資金を得るという意味で同団体を「金儲けの機械」（money machine）と呼ぶ島民もいる¹⁰⁾。

ゴンドウクジラは絶滅が危惧される鯨種ではない。IWCの生息数見積もりによれば、中部及び北東大西洋における生息数は1989年度に約78万頭とされており（IWC 2016）、2007年に実施された比較的最近の調査でも、アイスランドからフェロー諸島にまたがる海域だけで約12万8,000頭が生息しているとされている（ASCOBANS 2012）。それなのに、なぜフェロー諸島のゴンドウクジラ猟が環境保護団体によって非難されるのだろうか。この疑問に対しては、①フェロー島民が先住民ではなく、市場経済に組み込まれたデンマーク国民であると世界で認識されていること、②ゴンドウクジラがIWCの管轄外の鯨種であること、③捕獲数に制限がない上に、メスや子クジラも猟の捕獲対象になっていること、④猟そのものがクジラの屠殺や流血、内臓の露出を伴う衝撃的なもので、それが遮蔽物のない衆人環視の下で行なわれることなどの理由が挙げられよう（Kerins 2010: 19）。①について少し補足すると、過去においてはアラスカやカナダの極北地域に暮らすイヌイットの捕鯨などが環境保護団体のキャンペーンの対象になることがあったが、近年では、経済・文化的に弱い立場にある先住民に対する遠慮などもあり、対象から外されることが多い。組織の維持費やキャンペーンの活動費を市民からの募金に強く依存する環境保護団体にとって、「弱い者いじめ」をしていると見られるのは得策ではない。逆に言えば、日本人やフェロー島民のような豊かな国・地域の捕鯨者は、環境保護

団体の資金集めにとって格好の標的となる。また、④については、20世紀前半に活躍したフェローの国民作家であるヨルゲン・フランツ・ヤコブセンの有名な一節を紹介する。

戦争にも殺人にも無縁なフェロー島民がゴンドウクジラの追い込み猟を愛しているのは驚くべきことである。彼らはこのドラマから全く逃れることができない。一種の先祖返りに違いない。バイキング気質が突然息を吹き返す。[中略] 杖をついて麦わら帽子を被った夏服の穏やかな気質の男が突然ナイフを口に挟み、血だらけの海に飛び込み、あちこちを泳ぎ回り、右に左にナイフを突き刺すのを見たら、あなたはこの慎ましい男のことをどのように思うだろうか。(Joensen 2009: 220から引用)

フェロー島民でさえ説明しがたい猟の光景である。自らが日々口にする肉が解体される様子を見たことがなく、動物愛護の大切さを子供の頃から教え込まれてきた先進国の市民がゴンドウクジラ猟の様子を映像で見た時の衝撃は容易に想像できる。映像にショックを受けた先進国の市民は実際、猟の残酷さを非難する手紙や葉書をフェロー政府に大量に送り付けた。その数は最盛期の1985年秋から1986年初めにかけて、月1,000通に上ったと言う (Nauerby 1996: 157)。現在では抗議の多くは電子メールやソーシャル・メディアを通じたものになっている。いずれにしても、自分たちの暮らし方や伝統文化を否定されたと感じた島民たちは「レストランで牛肉のステーキを食べておきながら、ゴンドウクジラ猟を非難するのは道徳の二重基準だ。島でどのように暮らすのかは、私たち島民が決める」(Sjúrðaberg 2015) などと反発することになる。

3.4 反捕鯨運動への対応

フェロー島民も反捕鯨運動に対して手をこまねいてきたわけではない。捕鯨方法を人道的なものに改良したり、反捕鯨団体に対抗するために捕鯨団体を設立するなどの努力を重ねてきた。こうした努力の成果、また外から価値観を一方的に押し付けられることへの反発もあり、捕鯨を島の伝統文化として考える動きが島民、特に若者の間でも強まっている。それぞれについて順に見ていきたい。

猟に対する法規制の度重なる改訂によって、特に鯨産物の分配方法などについては組織化が進められてきたが、プロの捕鯨者ではなく自発的な住民ベースによる猟の性質上、捕鯨方法は基本的に現場任せが続き、鯨が「残酷で無秩序」と批判される一因になってきた。このためフェロー政府は動物福祉法を制定して、動物に不必要な苦しみを与えないことの徹底を図ってきた。ゴンドウクジラ猟に槍や鉞を使用することは1986年に禁止され、鯨に使う他の捕殺道具にも改良が加えられてきた(写真5)。たとえば、クジラを浜辺に引っ張り揚げる際に使われるロープ付きのフックは、先端部が尖ったものから丸まった形 (blowhole hook) に改められた。丸形のフックをクジラの噴気孔に引っ掛けて浜辺に引き寄せる仕組みである。道具の改良に取り組んできた獣医師のユスティネス・

オルセンは、改良型のフックを使用すれば、「クジラを傷付けることがなくなる上に、引っ張る人間側もあまり力を入れずにクジラを誘導できる」と話す (Olsen 2015)。もう1つ改良されたのが、クジラの脊椎と動脈を切断するのに使われる捕殺槍 (spinal lance) であり、ハンドルが2つ付いた長さ74センチの棒の先端部に楕円に近い両刃の剣先が付いている (NAMMCO 2014)。前述のオルセンによれば、①ハンドル付きのため捕鯨者が怪我をすることがなく安全である、②瞬時にクジラを絶命させることができる、③鯨体を何度も突いて傷付ける必要がなくなるため、肉質が良くなるなどの利点があると言う (Olsen 2015)。捕殺槍の使用は2015年5月から義務付けられている (Ministry of Foreign Affairs and Trade 2015)。この捕殺槍の有効性と安全性は、太地町の追い込み猟に導入されたことでも分かる。



写真5 ゴンドウクジラ猟の道具 (2015年9月11日, 筆者撮影: 真ん中のL字形の金属がクジラに引っ掛けるフック, その向かって右側にあるのが捕殺槍と鞘。鋸やナイフは現在では使われていない。)

捕殺槍の使用と同時に義務付けられたのが、許可証 (certificate) の所持である。2015年5月から島民は、ゴンドウクジラの解剖学的構造や捕殺槍の使用方法などに関する約2時間の講習を受けて許可証を発行してもらわないと、クジラを捕殺できなくなった¹¹⁾。捕鯨が無秩序に行なわれているとの外部からの批判に対応する狙いがある。島民の間には、猟の決まりが煩雑化することに対する不満の声も聞かれるが、猟を組織化することには概ね合意が得られていると言う (Olsen 2015)。

官民の話し合いによって捕鯨団体「フェロー・ゴンドウクジラ捕鯨者協会」(フェロー語で Grindamannafelagið, 英語表記は the Faroese Pilot Whalers' Association) が1993年に設立されたのも、反捕鯨運動への対応と見ることができる。それまでもコミュニティ単位で捕鯨者が集う機会はあったが、協会の設立によって全島的な話し合いの場が設

けられた。設立目的は、①持続可能な捕鯨の維持・発展、②国際協力の推進、③内外への情報発信、④科学調査への協力などである (Kerins 2010: 152)。協会のオラバー・シュラベーク会長によると、会員数は島の人口の約2%に当たる約1,200人である (Sjúrðaberg 2015)。地区単位の集会は、捕鯨者同士の交流の場になっているほか、政府担当者が捕鯨の国際的な状況、導入した法令や捕鯨方法、鯨肉の汚染問題などを説明する機会も提供している。毎年春に主都のトースハウンで総会が開かれ、活動状況や財政状況などが報告される (Kerins 2010: 153)。協会は2005年、島民に対する技術や知識の継承と対外広報を目的として、ゴンドウクジラ鯨の様々な面を紹介するDVDを制作した。流血を伴う鯨の残酷な面だけを強調したり、鯨のスポーツ性を指摘したり、鯨産物の多くが島民によって利用されずに廃棄されていると非難するなど、環境保護団体の「メディア操作」によってゴンドウクジラ鯨の悪いイメージがメディアで流布したことへの反省もあり、協会では外国のジャーナリストの取材や研究者の調査に積極的に応じることで、島民の立場を訴える努力を続けている (Sjúrðaberg 2015)。この点、イルカやクジラの追い込み鯨が環境保護団体から厳しく非難されるなど同じような境遇に置かれている和歌山県太地町の参考になるかもしれない¹²⁾。

反捕鯨運動はまた、ゴンドウクジラ鯨とそれに伴う食文化をフェロー諸島の伝統文化の象徴と捉える意識を島民、特に若者の間に育んでいる。フェロー大学の歴史学者であるハンス・アンドリアス・ソルバラは、島の若者のソーシャル・メディアへの書き込みの中でシー・シェパードへの反発が多く見られる点を指摘し、シー・シェパードの活動は「意図した行動が意図しない結果を生む典型例である」と述べる (Sølvará 2015)。シー・シェパードの過激な活動が、ゴンドウクジラ鯨に興味を失いつつあった若者のナショナリズムを刺激し、鯨を島のアイデンティティの象徴と捉える者の数が逆に増えているという現象である。

ゴンドウクジラ鯨に対する島民の賛否の割合を正確に捉えるのは難しいが、シー・シェパードが大規模な反捕鯨運動を展開した2014年の直前に実施されたギャラップ社の世論調査によれば、調査を受けた528人の島民の77%が鯨の継続を支持し、反対は12%に留まった (Singleton 2016: 30)。また、大学生など島の若者225人 (回答者の平均年齢18歳) を対象にした実施された別の調査では、クジラの追い込み・浜辺への引き揚げ・捕殺など鯨へ積極的に参加すると答えた者の割合は男性回答者の約半分を上った (Fielding 2013: 12)¹³⁾。

4 鯨肉汚染の影響と捕鯨の将来

これまで、シー・シェパードなど環境保護団体の反捕鯨キャンペーンに対する反発が島民の間で強まっていること、ゴンドウクジラ鯨を島の伝統文化の象徴と考えると、その

存続と発展を望む者が多くいることを見てきた。しかし一方で、島民の間でゴンドウクジラ鯨と鯨食文化の将来に対して悲観的な見方が広がっているという厳しい現実がある。ゴンドウクジラの肉と脂肪に水銀やPCB（ポリ塩化ビフェニール）などの汚染物質が大量に残留していることが分かり、捕鯨の将来に暗い影を投げかけているのである。環境保護団体も最近では、住民の健康への悪影響を捕鯨反対の論拠として宣伝している。

ゴンドウクジラの汚染に関する最初の調査が実施されたのは、工業先進国から排出される汚染物質の人体への影響が世界的に懸念され始めた1977年だった。ブランクトンや小魚などを髭板でこし取って食べる髭クジラと違って、魚やイカを捕らえて食べる歯クジラの仲間であるゴンドウクジラは食物連鎖の上位に位置する。こうした海洋動物が汚染物質を高濃度で体内に蓄積しやすいことは事前に予想されていたが、調査の結果は予想をはるかに超えるものだった。ゴンドウクジラの体内には高濃度の水銀が蓄積されていること、特に肝臓と腎臓の水銀濃度が鯨肉部分の約100倍に上ることが分かったのである（Weihe and Joensen 2012）。これを受けてフェロー政府は、島民に対して鯨肉の摂取を週1回に抑えるとともに肝臓と腎臓の消費を控えるよう勧告した¹⁴。1980年には、妊娠した女性は鯨肉と脂肪の消費を制限するべきであるとの勧告も出された。その後の研究で、クジラの脂肪部分にPCBやDDTなどの有機塩素化合物が高濃度で蓄積されていることが分かった。このため1998年の勧告はさらに厳しいものとなり、①鯨肉と脂肪の摂取を月2回以内に制限すること、②3か月以内に妊娠する予定か現在妊娠中、授乳中の女性は鯨肉を食べないこと、③肝臓と腎臓は一切食べないこととされた（同）。最新の勧告は2011年6月に出されたもので、鯨肉と脂肪の摂取が月1回以内とさらに厳しく制限されたほか、将来妊娠予定の女性は脂肪を全く摂取しないことが追加された（Faroese Food and Veterinary Authority 2011）。

鯨肉汚染の問題に当初から関わり、1984年以来、子供と母親の延べ約2,300人を対象にした大規模な健康調査を主導してきたフェロー医務部長のバル・バイエによると、汚染の影響は免疫系や中枢神経系にも及び、鯨肉摂取は高血圧や動脈硬化、パーキンソン病の進行などの影響をもたらすと言う（Chief Medical Officer 2008; Weihe 2015）。勧告の責任者であるバイエに対しては、島民から「フェローの文化とアイデンティティを壊すのか」などの非難の声も寄せられるが、当人は「彼らの気持ちは理解できるが、文化の問題を科学研究の考慮に入れることは許されない」と述べる（Weihe 2015）。ただし、勧告に強制力はなく、あくまで警告にとどまる。実際、トースハウンなどのような都市部ではなく村落に住む島民、特に中高年者の多くは比較的大量に鯨産物を摂取しているようである。

ゴンドウクジラ鯨の将来は不透明さを増している。環境保護団体の反捕鯨キャンペーンによって若者が鯨に参加するようになったとして鯨の将来を楽観視する捕鯨者協会のシュラベーク会長も、「捕鯨が中止されるとすれば、それは汚染によるものだ」と述べる

(Sjørødaberg 2015)。一方、バイエは未来を正確に予測するのは不可能であることわった上で、「2020年には捕鯨は終わると思っていたが、シー・シェパードなどの影響で延びた。しかし、2030年には終わるのではないか」と指摘する(Weihe 2015)。

厳しい自然の中で生活の糧を得る手段だったゴンドウクジラ鯨は、19世紀以来のナショナルリズムの高まり、外国の環境保護団体の反捕鯨キャンペーンに対する反発などもあって、守るべき伝統文化へと変質していった。実際、若者の間で鯨への関心が一部高まっているのは確かなようだが、自分の身体に悪影響が生じる可能性を知った上で、鯨肉と脂肪を日常的に摂取する若者は多くないだろう。考えられるシナリオは、クジラの肉と脂肪が日常食から祝日などハレの日だけに食べる特別な料理に変わっていくことである。ただし、前述したように、ゴンドウクジラの肉と脂肪には好き嫌いが分かれる独特の風味があり、幼少時に家庭料理として食べなかった者、稀にしか食べない者にとってはとっつきにくいかもしれない。ゴンドウクジラ鯨の歴史研究の第一人者で民族学者のヨアン・パウリ・ヨエンセンが「次第に好きになる味であり、食べ慣れる必要がある」(acquired taste)と述べる所以である(Joensen 2015)。ゴンドウクジラ鯨がいつまで存続するのかは誰にも分からないが、汚染問題という「静かな爆弾」の威力は強力である。環境保護団体のキャンペーンのようにメディア映えしないし、目立つこともない。しかし、それは島民の伝統文化、アイデンティティとしてのゴンドウクジラ鯨の将来を確実に蝕んでいく。

5 おわりに

本稿では、フェロー諸島の歴史と文化、産業について概観した後、バイキングの時代から島で行なわれてきたゴンドウクジラ鯨の歴史と捕鯨システム、鯨産物の分配方法と食文化などについて太地町との比較の中で紹介した。また、外国の環境保護団体による反捕鯨運動の衝撃とそれに対する島民の対応、鯨肉の汚染の影響と鯨の将来見通しについても考察した。フェロー諸島のゴンドウクジラ鯨は、特に欧米諸国で人気が高いクジラやイルカなどの鯨類を対象としている点、経済的に豊かな先進国の住民が鯨の実行者である点、激しい流血を伴う追い込み鯨と屠殺が人目につきやすい浜辺で行なわれる点において極めて特殊なものである。その特殊性が国際的な環境保護団体や外国メディアを引きつけ、ヨーロッパの辺境に位置する人口約5万人の小さな島を世界的に有名な場所に変えた。

島民の多くは自分たちの伝統が海外の目にどのように映っているのかを十分に理解しているが、一方で、身動きができない狭い檻や囲いに動物を生涯閉じ込めて、人の目が届かない扉の向こう側でその動物を屠殺することによって得られた肉製品を平気で口にする先進国の市民の態度とその偽善性に批判的である。今でも島民の多くは、自分のボ

ートで海に出て魚を獲ったり、家の庭で飼っている山羊を自らの手でさばいたりしている。筆者は2017年9月、調査のために訪れていたトースハウンの中心部において、地元
の農家が農畜産業振興を目的に、牛と羊の解体ショーを行なっている光景に出くわした。
辺りは血だらけで動物の死臭が漂っていたが、島民は気にする様子もなく、子供たちは
アイスクリームを食べながら、笑顔で解体ショーを楽しんでいた。地元の人によると、
フェロー諸島では幼稚園などでも動物の解体ショーが教育目的で実演されるそうである。
島民にとって自然は身近にあり、獲物の解体に伴う流血は日常の光景である。それは生
活の一部であり、隠し立てしなければならない恥とは考えられていない。次の一節は、
ゴンドウクジラ鯨の研究者であり、現在ではフェロー政府のヨーロッパ代表を務めている
ケイト・サンダーソンの言葉である。本稿を締めくくるに当たり引用したい。

ゴンドウクジラ鯨は、陸と海、社会的なものや野性的なもの、文化と自然、近代以前と近代
以後〔中略〕を分ける境界の邂逅と融合を象徴する。結果として、何が近代的で文明的な
ものなのかについての私たちの過度に硬直的な定義と、私たちと自然とのますます人工的な関
係を再考するよう私たちに要求する。フェロー諸島のゴンドウクジラ鯨はフェロー島民に食
料を提供するだけでなく、思考の糧も提供する。(Sanderson 1994: 199)

注

- 1) 本稿は、河島が『群馬大学社会情報学部研究論集』第24巻(2017)に投稿した論文「危機に瀕するデンマーク領フェロー諸島のゴンドウクジラ鯨」に加筆修正して改稿したものである。
- 2) フェロー諸島ではこのほか、バンドウイルカ、カマイルカ、ネズミイルカなども捕獲されるが、主眼はゴンドウクジラである。
- 3) 法規制によって、警察署長は、鯨の実施場所、クジラの種類と性別などに関するデータを鯨から3日以内に政府とフェロー自然史博物館に報告することが義務付けられている(Ministry of Fisheries 2013)。
- 4) たとえば、6つの地区のうち2地区(それぞれ1つの島を構成)では、鯨の参加者への取り分ではなく、地元住民だけで肉と脂肪を分け合うことになっている(The Government of Faroe Islands 2018b)。
- 5) このほか、学校、病院、介護施設などに対して肉と脂肪を提供することが慣習となっている。鯨産物の配分方法とその歴史的変遷については、塚田(1999)や宮脇(2009)が詳しい。
- 6) 島の人口の約40%が集中する主都トースハウンは、鯨が行なわれても、肉と脂肪はなかなか住民に行き渡らない。分配を希望する者は地区の割り当て名簿に登録する必要があるが、名簿の上位に来ないと、割り当ては回ってこない。
- 7) 世界各地で行なわれている捕鯨の現状とその文化人類学的研究の動向については、岸上(2011)を参照。
- 8) クジラが特別視される理由についてノルウェーの人類学者、アルネ・カランはスーパー・ホエール(super-whale)という概念を打ち出している。スーパー・ホエールは人懐っこさ、巨大な

脳、絶滅の危機など様々な種類のクジラが持つ特質を1頭で体現した架空のクジラである (Kaland 1993)。西洋でクジラが特別視されることになった歴史的経緯、クジラが特別扱いされる上で環境保護団体やメディアが果たした役割については河島 (2011) を参照。

- 9) フェロー諸島では1894年から1986年まで、ノルウェー人によって始められた商業捕鯨がナガスクジラやミンククジラなど大型の鯨種を対象に行なわれていた。
- 10) シー・シェパードなど環境保護団体の活動に、反捕鯨を資金集め的手段として利用する「抗議ビジネス」の側面があることについては、河島 (2012) を参照。
- 11) ゴンドウクジラ猟の許可証を受けた島民の数は2015年9月時点で2,230人に上っている (Olsen 2015)。
- 12) 太地町とフェロー諸島第2の町であるクラクスヴィークは2018年1月に姉妹都市提携を結んだ。地理的に遠く離れてはいるものの、捕鯨をコミュニティのアイデンティティとしている点、反捕鯨団体の標的になっている点など両者には共通点が多い。今後、様々な形で交流が活発化するものと思われる。
- 13) 同調査の実施年は残念ながら不明だが、論文発表の時期から推察すると、2010-11年頃と見られる。
- 14) 体重70キロの成人の場合、1回の食事で摂取する鯨肉の量は250グラム、脂肪は50グラムと見積もられている (Faroese Food and Veterinary Authority 2011)。

参考文献

ASCOBANS (Agreement on the Conservation of Small Cetaceans of the Baltic, North East Atlantic, Irish and North Seas)

2012 Pilot Whale Hunt in the Faroe Islands. (Internet, 19 April 2019, file:///C:/Users/moto/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/67Q13GOO/AC19_5-01_FaroeIslands-Grind_1.pdf)

Chief Medical Officer (The Faroe Islands)

2008 Recommendations to the Government of the Faroe Islands Concerning the Pilot Whale. (Internet, 19 April 2019, file:///C:/Users/moto/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/67Q13GOO/Medical_Recom_Whale2008.pd)

遠藤愛子

2011 「変容する鯨類資源の利用実態—和歌山県太地町の小規模沿岸捕鯨業を事例として」松本博之編『海洋環境保全の人類学—沿岸水域利用と国際社会』(国立民族学博物館調査報告97) pp. 237-267, 大阪: 国立民族学博物館。

The Government of Faroe Islands

2018a The Official Gateway to the Faroe Islands. (Internet, 22 March 2018, <http://www.faroeislands.fo/>)

2018b Whales and Whaling in the Faroe Islands. (Internet, 22 March 2018, <http://www.whaling.fo/>)

Faroese Food and Veterinary Authority

2011 Dietary Recommendation on the Consumption of Pilot Whale Meat and Blubber. (Internet, 19 April 2019, file:///C:/Users/moto/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/87C

ZDHE5/Diet%20recommandation%20on%20the%20consumption%20of%20whale%20meat%20and%20blubber.%20Summary,%20June%202011.pdf)

Fielding, R.

2013 Whaling Futures: A Survey of Faroese and Vincenitian Youth on the Topic of Artisanal Whaling. *Society and Natural Resources* 26(7): 1-17.

Fielding, R., J. E. Davis Jr., and B. E. Singleton

2015 Mutual Aid, Environmental Policy, and the Regulation of Faroese Pilot Whaling. *Human Geography* 8(3): 37-48.

IWC (International Whaling Commission)

2016 Whale Population Estimates. (Internet, 22 August 2016, <https://iwc.int/estimate>)

Joensen, J. P.

2009 *Pilot Whaling in the Faroe Islands: History, Ethnography, Symbol*. Tórshavn, the Faroe Islands: Faroe University Press.

2015 Interview by the Author, 16 September 2015.

Kalland, A.

1993 Management by Totemization: Whale Symbolism and the Anti-Whaling Campaign. *Arctic* 46(2): 124-133.

河島基弘

2011 『神聖なる海獣—なぜ鯨が西洋で特別扱いされるのか』京都：ナカニシヤ出版。

2012 「『法』の裁きを下すメディア時代の自警団？—シー・シェパードの反捕鯨キャンペーンの一考察」岸上伸啓編『捕鯨の文化人類学』pp. 302-316, 東京：成山堂書店。

2017 「危機に瀕するデンマーク領フェロー諸島の Gondouk Jirafu」『群馬大学社会情報学部研究論集』24: 15-31。

Kerins, S.

2010 *A Thousand Years of Whaling: A Faroese Common Property Regime*. Edmonton, Canada: CCI Press.

岸上伸啓

2011 「捕鯨に関する文化人類学的研究における最近の動向について」『国立民族学博物館研究報告』35(3): 399-470。

Ministry of Fisheries (The Faroe Islands)

2013 Executive Order on the Pilot Whale Drive (Internet, 19 April 2019, <http://www.whaling.fo/media/1041/grindakunnger%C3%B0plus2013plusen-1.pdf>)

Ministry of Foreign Affairs and Trade (The Faroe Islands)

2015 Information Memorandum: Community-based Whaling in the Faroe Islands. (Internet, 19 April 2019, file:///C:/Users/moto/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/67Q13G00/info-memo-grind-230915.pdf)

宮脇和人

2009 「国家が管理する捕鯨—フェロー諸島における捕鯨の実態と捕鯨がになう多面的な役割」『地域漁業研究』50(1): 21-48。

NAMMCO (North Atlantic Marine Mammal Commission)

2014 Instruction Manual of Pilot Whaling. (Internet, 19 April 2019, file:///C:/Users/moto/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/PJQWJTFT/manual-on-pilot-whaling-english-ver-

- sion.pdf)
- Nauerby, T.
1996 *No Nation Is an Island: Language, Culture, and National Identity in the Faroe Islands*. Aarhus, Denmark: Aarhus University Press.
- 大隅清治
2017 「フェロー諸島におけるイルカの追い込み漁」『鯨研通信』476: 7-19。
- Olsen, J.
2015 Interview by the Author, 11 September 2015.
- Proctor, J.
2013 *Faroe Islands* (3rd edition). Chalfont St Peter, UK: Bradt Travel Guides.
- Sanderson, K.
1994 Grind: Ambiguity and Pressure to Conform: Faroese Whaling and the Anti-Whaling Protest. In M. M. R. Freeman and U. P. Kreuter (eds.) *Elephants and Whales: Resources for Whom?* pp. 187-201. Basel, CH: Gordon and Breach Science Publishers.
- SSCS (Sea Shepherd Conservation Society)
2015 Operation Sleppid Grindini 2015: Defending Dolphins in the Faroe Islands. (Internet, 18 August 2016, <https://www.seashepherdglobal.org/faroes/about-campaign/about-the-campaign.html>)
2016 Sea Shepherd Captain Returns to the Faroe Islands to demand Landmark Trial Court Date. (Internet, 22 August 2016, <http://www.seashepherd.org/news-and-media/2016/08/02/sea-shepherd-captain-returns-to-the-faroe-islands-to-demand-landmark-trial-court-date-1832>)
- Singleton, B. E.
2016 Love-iathan, the Meat-whale and Hidden People: Ordering Faroese Pilot Whaling. *Journal of Political Ecology* 23: 26-48.
- Sjørðaberg, O.
2015 Interview by the Author, 9 September 2015.
- Sølvará, H. A.
2015 Interview by the Author, 9 September 2015.
- 塚田秀雄
1999 「クジラは誰のものか— 追い込み漁を通じて見たフェロー諸島の村落社会構造」 *Journal of Baltic and Scandinavian Studies* 8/9: 19-40。
- 和歌山県
2018 「太地町でのイルカ漁業に対する和歌山県の公式見解」 <http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/071500/iruka/index.html> (2018年3月12日閲覧)
- Watson, P.
1994 *Ocean Warrior: My Battle to End the Illegal Slaughter on the High Seas*. Toronto, Canada: Key Porter Books.
- Weihe, P.
2015 Interview by the Author, 16 September 2015.
- Weihe, P. and H. D. Joensen
2012 Dietary Recommendations Regarding Pilot Whale Meat and Blubber in the Faro Islands. *International journal of Circumpolar Health* 2012: 1-5.